

# 近江商人吉村儀兵衛家の雇用形態（１）

Employment System of an Omi Merchant from the Yoshimura Family

上 村 雅 洋  
Uemura, Masahiro

## ABSTRACT

The Yoshimura family is a family of Omi merchants who created Kodani-mura in Omi headquarters. The Yoshimura family established the store in the Kanto district during the Edo period, and engaged in brewing. This paper aims to clarify the employment system of the Yoshimura family, and analyzes the characteristics of an Omi merchant whose business includes the running of a manufacturing department. This is compared to an Omi merchant that is engaged only in trading activity.

## はじめに

近江商人吉村儀兵衛家については、すでに近江国蒲生郡小谷村を本拠地とし、下野国芳賀郡谷田貝（久下田）に出店を設け、酒造業を展開していった状況について明らかにしてきた<sup>(1)</sup>。本稿では、吉村儀兵衛家の雇用形態を中心に、さらに分析を進めて行きたい。近江商人の雇用形態については、すでに近江出身者の雇用、在所登り制度などの特徴とともに、10代前半での出仕、勤続年数の短さ、退職理由、別家制度、給金・昇進状況などについて、明らかにされている。

---

（１）拙稿「近江商人吉村儀兵衛家と酒造業」（高嶋雅明・天野雅敏編『近世近代の経済と社会』清文堂出版、2009年）、ほかに吉村家については、二宮町史編さん委員会編『二宮町史』通史編Ⅱ 近世（二宮町、2008年）に詳しい。

(2) する。しかし、同じ近江商人でも、製造部門を包摂する日野商人における雇用形態は、単に呉服太物などの商業活動に従事した近江商人とは異なるのではないかという点が指摘されてきた。

こうした製造部門を包摂した近江商人である日野商人の雇用形態についても、すでに正野玄三家<sup>(3)</sup>と山中兵右衛門家<sup>(4)</sup>について、分析が進められている。合葉の製造・販売を行っていた正野家については、近江商人の雇用形態の特性（近江出身者の雇用、10代前半の出仕年齢、別家制度、仕着と給金）を見出し、近代以降においては本家と本店の区別、店員の役務分担の明確化、学校教育の影響などによる新たな変化もみられたが、昭和期に入っても依然として江戸時代以来の近江商人の雇用形態が維持されていたことなど具体的な実態が明らかにされた。また、酒造業を営んでいた山中兵右衛門家では、奉公人請状を分析され、出仕年齢のばらつきが多いこと、近江国でも日野の本家所在地よりも甲賀郡の出身者が多かったこと、年季は10年が想定されていたこと、給金や登り年（初登りは7年目）などの規定について具体的に明らかになってきた。しかし、こうした雇用に関する研究もまだ緒についたばかりであり、さらなる事例の積み重ねが求められている。

本稿では、こうした近江商人の雇用形態を、特に酒造業という製造部門を包摂した雇用のあり方に注目しながら、分析することにした。また、儀兵衛家の当主である儀兵衛とその家族のあり方、奉公人との関係などについても同時

---

(2) 拙著『近江商人の経営史』（清文堂出版、2000年）。

(3) 拙稿「近江商人正野玄三家の事業と奉公人」（徳永光俊・本多三郎編『経済史再考』思文閣出版、2003年）、同「近江商人正野玄三家の奉公人と給金」（『大阪大学経済学』第54巻第3号、2004年）、同「明治期における近江商人正野玄三家の家則と店則」（滋賀大学経済学部附属史料館『研究紀要』第39号、2006年）、同「近代における近江商人正野玄三家の雇用形態」（和歌山大学『経済理論』第332号、2006年）。

(4) 宇佐美英機「近江日野商人山中兵右衛門家の奉公人請状」（『彦根論叢』第359号、2006年）、同「明治期山中兵右衛門家の奉公人請状」（『彦根論叢』第365号、2007年）。『近世・近代における商業資本発達史の研究—近江商人・山中兵右衛門家の経済史的研究—』（平成15年度～平成17年度科学研究費補助金 基盤研究（B）（2）研究成果報告書、研究代表者筒井正夫、2006年）。

に考えてみたい。

## １ 出店の「御宗旨人別書」と儀右衛門家

吉村儀兵衛家は、下野国芳賀郡久下田（谷田貝町）に出店を設け、酒造業を営んでいた。ほかに、上ノ店、鷺巣店、柿岡店、横堀店、恩名店、下妻店などの店が存在したことが知られている。本店である久下田店には、享和２年（1802）<sup>(5)</sup>から明治５年（1872）に至る「御宗旨人別書」<sup>(6)</sup>が、ほぼ連年残されている。

享和２年正月の「御宗旨人別書」によれば、久下田店の人員構成は、次のようになっている。儀右衛門を筆頭に「べ拾八人」の者が書き上げられており、そのうち「六人店」<sup>(7)</sup>とある。谷田貝町の曹洞宗芳全寺の旦那には、儀右衛門（51歳）、理右衛門（70歳）、彦五郎（35歳）、惣兵衛（56歳）、太兵衛（24歳）、善兵衛（31歳）、弥兵衛（30歳）、安治郎（19歳）、磯八（42歳）、又兵衛（27歳）、万蔵（16歳）、忠兵衛（50歳）が記されている。それに続いて「送証文主人方へ取置申候」として、宗旨や旦那寺が異なる市兵衛（32歳、「浄土真宗」「越後頸城郡かんど村」）、長蔵（27歳、「禅宗」「江州神崎郡柳瀬村」）、利助（25歳、「浄土宗」「江州彦根後三条町」）、銀蔵（24歳、「浄土宗」「下総豊田郡中妻町」）、文七（30歳、「真言宗」「越後三嶋郡とまり村岩町」）、糸八（22歳、「天台宗」「下野芳賀郡大根田村」）の名前が書き上げられている。ここで近江出身者だけでなく、越後出身者が含まれているのは、越後の蔵人が含まれている可能性を示している。

（５）前掲『二宮町史』通史編Ⅱ，437頁。

（６）栃木県立文書館寄託吉村儀兵衛家文書。表題は、「御宗旨人別書」「宗門人別書上」「御宗門人別」などさまざまである。現在合計69冊分が残存するが、文化3年と明治2年分が欠落している。内容は、儀兵衛家のみを記したもので、谷田貝町に居住する他家の家族をも含めた行政単位で作成されたものではない。前掲『二宮町史』通史編Ⅱ（423～444頁）でも、同史料を用いて本稿で述べるような点を指摘されている。

（７）「内六人見せ」などの表示は、文化10年までの「御宗旨人別書」に記されており、毎年5～6人が「店」となっている。店員のことを示すものとも考えられるが、文化11年正月の「御宗旨人別書」には、「当戊正月利右衛門方別紙人別書上申候二取究申候」とあることから、利右衛門の別店分を含んでいたために、このように記されたようで、文化11年以降の「御宗旨人別書」にはこうした記載は見られない。

享和2年から明治5年までの構成員数の変化を見てみると、享和2年から文化10年(1813)までは16～19人、文化11年から文政11年(1828)までは12～13人であり、文政13年には8人と少し落ち込むが、弘化4年(1847)まで11～13人を維持し、嘉永2年(1849)から明治3年までは9～10人で、明治4～5年は8人となっている。文化11年の急激な人員の落ち込みは、利右衛門<sup>(8)</sup>方が別帳に記載されるようになったためによるものと思われる。したがって、久下田店の員数は、10～13人でほぼ安定しており、幕末期には9人とやや減少<sup>(9)</sup>した程度であった。

これらの人員のうち、儀兵衛家の家族と思われるのは、儀右衛門、庄助(庄介)、伊右衛門である。享和2～3年には、儀右衛門(2代目)だけであるが、享和4年から庄助が18歳で初めて登場し、当時53歳の儀右衛門とともに久下田店にいた。伊右衛門が最初に登場するのは、文政2年の36歳のときであり、68歳の儀右衛門と33歳の庄助とがいた。文政12年には、儀右衛門が78歳、庄助が43歳、伊右衛門が46歳であり、翌年の文政13年には儀右衛門44歳、伊右衛門47歳で、庄助が欠けているところから、文政13年に悴の庄助が儀右衛門(3代目)を相続したものと思われる。そして、翌年の天保2年(1831)には、儀右衛門45歳、庄助「悴」8歳、伊右衛門「弟」48歳と明記されている。その

---

(8) 前掲(7)参照。利右衛門は、理右衛門とも記され、享和2年の「御宗旨人別書」以降の儀右衛門(享和4年からは儀右衛門、庄助の次)に次いで記載されており、文化10年には、81歳の最高齢者であった。

(9) 吉村儀兵衛家の関東での出店は、久下田店(本店)だけでなく、上ノ店、鷺巣店、柿岡店、横堀店、恩名店、下妻店などがあり、ここでは史料の性格から久下田店に居住していた家族・奉公人が対象となる。

天保5年正月「日下栄」(日野町史編さん室寄託吉村儀兵衛家文書)には、袋の表書に「関東店用入」とあるように、そこでは関東各店への奉公人の派遣・移動が記されていた。たとえば、伊八は、文政3年9月13日に勤め、同11年に「横堀店へ遣ス」とある。庄兵衛は、文政10年10月に初下りし、天保7年「夏中暇遣ス」として「鷺巣勤」とある。儀助は、天保3年春から勤め、同7年8月「暇遣ス」として「上ノ店勤メ」とある。忠蔵は天保6年正月「本店勤」、常次良は同5年8月より「恩名遣ス」、伊助は同12年3月より勤め、「柿岡店」とある。

後も天保12年まで儀右衛門55歳、「悻」庄助18歳、「弟」伊右衛門58歳と続くが、天保13年には「弟」伊右衛門が27歳とあり、この年に伊右衛門も代替わりをしている。さらに、伊右衛門と思われる人物は、翌年の天保14年には、「弟」宗右衛門28歳とあり、天保15年には「弟」惣右衛門29歳となっている。以後慶応3年（1867）まで惣右衛門（宗右衛門）が存続し、同年には儀右衛門44歳、庄助43歳、惣右衛門52歳とある。翌年の慶応4年には「惣右衛門悻」音吉18歳とあり、代替わりをしている。儀右衛門も、弘化2年には59歳であったのが、翌年の弘化3年には儀右衛門23歳、庄助22歳、惣右衛門31歳となっており、この時点で儀右衛門も4代目へ代替わりが行われていたことがわかる。

このように、儀右衛門の家族としては、悻の庄助と弟の伊右衛門（惣右衛門）の3名が、ほぼ毎年久下田店に居住していたものと思われる。

この「御宗旨人別書」については、享和2年から文政12年までは、儀右衛門をはじめ「当町芳全寺旦那」に属する者とそれ以外の旦那とを区別して記されており、文政12年には儀右衛門（78歳）、庄介（43歳）、伊右衛門（46歳）、惣兵衛（47歳）、嘉吉（31歳）、平蔵（30歳）、岩吉（22歳）、和七（19歳）、勝三郎（14歳）が、「当町芳全寺旦那」であり、与兵衛（39歳）だけが、「本願寺、榊原式部大夫様御領分越後首城郡上下浜者浄蓮寺旦那」と記されている。文政13年から天保3年までは、「当町芳全寺旦那」とは明記されていないが、与兵衛のみ「浄蓮寺旦那」とされている。天保4年から弘化4年までは、旦那寺のことは何も注記されていない。嘉永元年から明治5年まで親族の儀右衛門と悻・弟以外の者については、その出身地と身分だけが記されており、旦那寺は明記されていない。

たとえば、嘉永元年には、儀右衛門（25歳）、庄助（24歳）、惣右衛門（33歳）の親族以外に、平蔵（49歳、「榊原式部大輔様御領分越後国頸城郡鉢崎村、百姓助三郎悻」）、新兵衛（30歳、「嘉藤越中守様御領分江苧蒲生郡日野、百姓新兵衛悻」）、儀三郎（27歳、「井伊掃部頭様御領分江苧蒲生郡野出村、百姓惣兵衛悻」）、梅吉（26歳、「稲葉丹後守様御領分江苧栗田郡二町村、百姓三郎兵衛悻」）、市五郎（13歳、「松平周防守様御領分江苧蒲生郡

益田村, 百姓忠右衛門悻)], 永吉 (13 歳, 「井伊掃部頭様御領分江菟蒲生郡一色村, 百姓藤右衛門悻)], 伝蔵 (46 歳, 「井伊掃部頭御領分江菟蒲生郡二俣村, 百姓源四郎悻)]) とある。

また, 親族以外の奉公人を「下代」と「下男」に区別して記している年もある。たとえば天保5年には, 「下代」として平蔵 (35 歳), 喜兵衛 (35 歳), 義三郎 (52 歳), 豊吉 (27 歳) と, 「下男」として勝三郎 (18 歳), 新三郎 (16 歳), 与兵衛 (44 歳), 伝蔵 (32 歳) とが区別して書かれ, 店方奉公人と蔵人との区別を示しているようにも推定される。しかし, これも厳密なものではないようで, 天保7年にはすべてが「下代」となっている。さらに, 嘉永元年になると「年季召抱」4人, 「年季見習」1人と何も記されていない者2人があったが, 安政5年以降には親族以外はすべて「年季召抱」となっている。このように「御宗旨人別書」には, 越後の頸城郡や三島郡の者が含まれていることから蔵人をも一部含んだ陣容になっていたようである。しかし, 「御宗旨人別書」に記される越後の人々の数は, しだいに少なくなり, 文化13年には三太郎 (一向宗, 頸城郡上下浜村淨蓮寺旦那) だけとなり, 文政2年からは代わって与兵衛<sup>(10)</sup> (同) だけとなり, 嘉永元年には平蔵だけとなり, 同6年に平蔵が退いてからはすべて近江出身者で占められていた。しかも, 近江出身者でもそのほとんどが日野を含む蒲生郡出身者であった。

明治6年1月の「寄留書上」<sup>(11)</sup>があるので表1に掲げておこう。この表には, 儀右衛門を除く19人の男が掲げられている。このうち弥平以下11人は「酒造方ニ寄留」とあり, 酒造労働者である可能性が高く, 太平から政吉にいたる8人は「蔵人」として別に書き上げられている。新平から喜平にいたる8人の出身は, 常州新治郡柿岡村の庄吉を除けば, すべて近江国蒲生郡の出身である。しかも, 新平と吉治郎, 惣平と久太郎は親子2代で奉公に来ている。また, 弥平以下は越後国7人, 越中国1人, 下野国1人, 近江国2人であり, 越後国出身者が多くを占めているものの, 近江出身者の酒造労働者も含まれていること

(10) 三太郎と与兵衛は年齢, 旦那寺が連続しており, 同一人物の可能性が高い。

(11) 明治6年1月「寄留書上」(栃木県立文書館寄託吉村儀兵衛家文書)。

表１ 明治６年１月吉村儀兵衛家久下田店寄留人

名前	年齢	出身地	続柄	寄留年月日	備考
新平	55	近江国蒲生郡日野岡本町	二男	天保２年４月１４日	
吉治郎	21	近江国蒲生郡日野岡本町	長男	文久３年９月９日	
惣平	52	近江国蒲生郡野出村	長男	天保４年８月１６日	
久太郎	17	近江国蒲生郡野出村	長男	明治５年６月３０日	
文治郎	16	近江国蒲生郡増田村	長男	明治２年８月４日	
庄吉	41	常陸国新治郡梯岡村	二男	慶応３年１０月９日	
菊松	24	近江国蒲生郡中山村	三男	安政６年５月２３日	
喜平	32	近江国蒲生郡木津村	長男	明治５年３月２４日	
弥平	34	越後国頸城郡末野村	二男	明治４年８月２１日	酒造方
惣吉	22	越後国頸城郡柳町村	三男	明治４年３月２７日	酒造方
勝二郎	18	下野国都賀郡芦戸村	二男	明治５年４月１０日	酒造方
太平	30	越中国戸並郡安房村	長男	明治５年８月３日	酒造方
熊吉	26	越後国三嶋郡不動沢村	長男	明治５年８月２７日	酒造方
徳蔵	23	越後国三嶋郡不動沢村	二男	明治５年８月２７日	酒造方
政吉	27	越後国三嶋郡不動沢村	長男	明治５年９月４日	酒造方
市蔵	22	越後国三嶋郡不動沢村	長男	明治５年９月２１日	酒造方
七之助	26	越後国大沼郡塩下り村	長男	明治５年１０月２０日	酒造方
兼吉	34	近江国蒲生郡羽田村	五男	明治５年９月７日	酒造方
政吉	28	近江国甲賀郡田川村	二男	明治５年１０月３０日	酒造方

（注）明治６年１月「寄留書上」（栃木県立文書館寄託吉村儀兵衛家文書）より作成。

に注目したい。熊吉と徳蔵は、越後国三嶋郡不動沢村の堺権吉の長男・二男の兄弟であった。このように久下田店の陣容は、主として近江出身者の店員と越後出身の酒造労働者によって構成されていたことがわかる。

勤続年数を見てみると、表２のようになり、５年以内に５５％（３年以内では４２％）、１０年以内では７９％の者が店を離れている。しかし、２０年以上も比較的長期にわたって雇用されている者もいる。文化１３年に１７歳で雇用され、嘉永５年の５３歳まで３７年間勤め、芳全寺旦那となっていた越後国頸城郡鉢崎村百姓助三郎倅の平蔵、天保５年に３２歳で雇用され、安政４年の５５歳まで２４年間勤めた近江国蒲生郡二俣村百姓源四郎倅の伝

表２ 勤続年数

勤続年数（年）	人数（人）
1	16
2	9
3	12
4	6
5	6
6	4
7	7
8	5
9	4
10	1
11	6
13	2
14	1
15	3
16	1
19	2
20	1
24	1
27	1
37	1
合 計	89

（注）各年の「御宗旨人別書」（栃木県立文書館寄託吉村儀兵衛家文書）より作成。



蔵、天保3年に14歳で雇用され<sup>(12)</sup>、明治6年にも55歳(36年間)でまだ勤務していた近江国蒲生郡日野の新兵衛、天保12年に20歳で雇用され、慶応3年の46歳まで27年間勤めた近江国蒲生郡野出村百姓惣兵衛倅の儀三郎などがいた。また、蒲生郡野出村の儀三郎親子、蒲生郡日野の新兵衛・吉太郎親子、蒲生郡増田村の勇蔵・文太郎親子、蒲生郡野出村の惣兵衛・岩次郎親子のように累世代にわたって雇用されている場合も見られた。

次に、入店年齢<sup>(13)</sup>と退店年齢<sup>(14)</sup>を判明する範囲で見ると、表3のようになる。最も若い年齢での入店は13歳で4人おり、最も高齢は53歳で2人いる。文化12年に53歳で入店した七郎兵衛は、1年間しか在店しておらず、文化4年に53歳で入店した甚兵衛も、翌年まで2年間しか在店していない。文化5年に52歳<sup>(15)</sup>で入店した彦右衛門は、文化11年の58歳まで7年間勤務している。入店年齢は、一般的には10代前半が多いと思われたのに、それが11人と意外に少なく、20代以降にも多くの者が雇用されており、30代はもちろん40代や50代でも少なからず雇用が見られる<sup>(16)</sup>。退店年齢は、入店年齢が高いため高くなり、40代や50代でも多くの者が勤めているようすがわかる。

こうした入店年齢の高さ、退店年齢の高さに見られる特徴は、「御宗旨人別書」には、店方奉公人だけでなく、酒造労働者や下男が含まれていたことによるものと思われる。それが、また酒造業という製造部門を包摂した事業を営んでいる近江商人の雇用の特徴とな<sup>(17)</sup>って現れていたようである。

(12) 新兵衛は、明治6年1月「寄留書上」では天保2年4月14日寄留とあり、最初は新三郎という名前であったが、天保9年から新兵衛を名乗ったようである。

(13) 「御宗旨人別書」は1月に記録されているため、前年の2月以降に入店した者は、1歳遅れた入店年齢となっており、厳密ではない。

(14) 享和2年時点での在店者は、入店年齢が不明なので除外した。

(15) 文化5年正月「御宗旨人別書」には53歳と記されているが、翌年の史料にも53歳とあり、52歳の記載違いと判断した。

(16) 前掲宇佐美英機「近江日野商人山中兵右衛門家の奉公人請状」でも、出仕年齢の高さを指摘され、それは酒造・醤油造の力仕事のために壮健な年長者が雇用されたことによるものと推測されている。



表 3 入店年齢と退店年齢

入店年齢（歳）	人数（人）	退店年齢（歳）	人数（人）
13～15	11	13～15	1
16～20	20	16～20	18
21～25	17	21～25	22
26～30	15	26～30	20
31～35	11	31～35	16
36～40	7	36～40	7
41～45	2	41～45	4
46～50	4	46～50	9
51～53	3	51～55	6
54～	0	56～58	4
合 計	90	合 計	107

（注）表 2 に同じ。

## 2 小谷村の「宗門御改帳」と儀兵衛家

ここでは、吉村儀兵衛家の本拠地である近江国蒲生郡小谷村における儀兵衛家の家族構成を「宗門御改帳」および「人別御改手形之事」によって確認し、久下田店の儀右衛門との関係を考察することにする。

吉村儀兵衛は、前稿で明らかにしたように、宝暦 5 年（1755）頃に五郎兵衛家から分家したようである。宝暦 4 年 6 月の「宗門御改帳」では、兄の五郎兵衛（42 歳）の家族として弟儀兵衛（37 歳）と併記され、そこに付箋が付けられ、女房（16 歳）と母と儀兵衛の 3 人に書き改められている。儀兵衛が、五郎兵衛家から母智教を伴い分家し、女房を迎えたのである。そして、宝暦 6 年 6 月の「宗門御改帳」では、儀兵衛（39 歳）、女房（17 歳）、母智教（64 歳）の合計 3 人が下女 1 人（「増田村之者浄土宗同村誓善寺旦那」）とともに掲載されている。儀兵衛家は、「浄土宗小谷村宗福寺旦那」であった。

「宗門御改帳」は小谷村の全家族の構成が記されており、宝暦 4 年から寛政 12 年（1800）までの分が、欠年も見られるが<sup>(18)</sup>残されており、47 年に及ぶもので

✓ (17) また、ここでは本店（久下田店）の人員を対象としており、吉村儀兵衛家の他店との移動が含まれているため、こうした結果に影響した可能性もある。

(18) 日野町史編さん室寄託吉村儀兵衛家文書。いずれも 6 月に作成されたもので、宝暦 4, 6, 7, 9, 11, 12, 13, 14, 明和 6, 7, 8, 安永 6, 7, 9, 10, 天明 2, 3, 4, 8, 寛政元, 2, 3, 9, 10, 11, 12 年の 26 冊である。

ある。これにより、その間の儀兵衛家の家族構成が、次のように明らかになる。

宝暦7年は、儀兵衛(40歳)、女房(18歳)、男子与三五郎(1歳)、母智教(65歳)の合計4人家族となった。この儀兵衛が初代の儀兵衛である。宝暦11年には、儀兵衛(44歳)、女房(22歳)、男子与三五郎(5歳)、同乙吉(2歳)、母智教(69歳)の合計5人家族となっており、宝暦10年に次男の乙吉が誕生したことがわかる。明和6年(1769)には、儀兵衛(52歳)、女房(35歳)、男子与三五郎(13歳)、同乙吉(8歳)、母智教(77歳)の合計5人家族で変化はないが、女房に「今年入申候」と注記があり、前妻が宝暦14年から明和6年(1769)の間に亡くなったか、後妻を迎えたようである。安永6年(1777)には、儀兵衛(60歳)、女房(43歳)、男子永助(21歳)、同乙吉(16歳)の合計4人家族となり、明和8年から安永6年の間に母智教が亡くなったものと思われ、与三五郎も永助と改名した。安永7年には、儀兵衛(61歳)、女房(44歳)、男子永助(22歳)、同乙吉(17歳)の合計4人家族であったが、永助の傍らに「女房、亥ノ二月入申候、同十七」の追筆があり、安永8年2月に妻を娶り、合計5人の家族になっている。安永9年には、儀兵衛(63歳)、女房(46歳)、男子永助(24歳)、女房(「当二月入申候」)、男子乙吉(19歳)の合計5人とあり、儀兵衛には「宗説相改申候」と、隠居したのか改名している。安永10年には、永助(「永介」、25歳)、女房(19歳)、弟乙吉(20歳)、宗説(「儀兵衛事」、64歳)、女房(47歳)の合計5人家族であったが、宗説には「相果申候、去八月」と付箋があり、安永10年8月に死亡したようである。

天明2年(1782)には、永助(「儀兵衛、永介事ニ御座候」、26歳)、女房(20歳)、弟乙吉(21歳)、宗説(「去八月相果申候」)、女房(「母」、48歳)の合計4人家族であり、儀兵衛家の代替わりが行われた。これにより2代目儀兵衛となる。さらに、女房の傍らに付箋があり、「女子よつ、去七月出生仕候」とあり、天明2年7月に儀兵衛に女兒が誕生したようである。天明4年には、儀兵衛(28歳)、女房(22歳)、女子よつ(「当正月相果申候」)、母(50歳)、弟乙吉(「弥三兵衛、乙吉事ニ御座候」、23歳)の合計4人家族であった。女兒よつは天明4年正月に死亡し、弟乙吉は

弥三兵衛に改名したようである。天明 8 年には、儀兵衛（32 歳）、女房（27 歳）、男子市太郎（2 歳）、弟弥惣兵衛（弥三兵衛、24 歳）、母（54 歳）の合計 5 人家族であり、市太郎が前年に誕生したようである。

寛政元年（1789）には、儀兵衛（33 歳）、女房（28 歳）、市太郎（3 歳）の 3 人家族となり、弟の弥惣兵衛が「酉十一月ニ別家仕候」と分家し、母も「弥惣兵衛方同酉十一月隠居仕候」と弟に伴い隠居した。そのため寛政元年には、儀兵衛家とは別に、弥惣兵衛（27 歳）、女房（「戌四月ニ貫申候」、18 歳）、母（56 歳）からなる弥惣兵衛家として独立している。寛政 3 年には、儀兵衛（35 歳）、女房（30 歳）、男子市太郎（5 歳）、弟亦治郎（2 歳）の合計 4 人家族となり、亦治郎が「戌十一月出生仕候」と寛政 2 年 11 月に誕生したが、「亥ノ十一月相果申候」と翌年に死亡している。寛政 9 年には、儀兵衛（41 歳）、女房（36 歳）、男子市太郎（11 歳）、女子なべ（3 歳）、男子与惣松（「当三月出生仕候」、1 歳）の合計 5 人家族で、なべと与惣松が誕生している。寛政 12 年には、儀兵衛（44 歳）、女房（39 歳）、男子市太郎（14 歳）、妹なべ（6 歳）、妹とよ（「当正月出生仕候」、1 歳）の 6 人家族になり、員数が増えている。

なお、この「宗門御改帳」には、下男・下女についても出身と旦那寺が寛政 3 年まで明らかになる。そこで、儀兵衛家の下男・下女について少し見ておこう。分家直後の宝暦 6 年には、下女 1 人がいたが、同 7 年には下男 1 人となり、安永 6 年からは下男 1 人と下女 1 人を抱えるようになっていた。下男・下女は、ある程度同じ人物が数年雇用されており、下男は一色村、瓜生津村、羽根田村、大森村、常安寺村、尼子村、東出村の者、下女は如来村、安部居村、北脇村、中在寺村の者であり、蒲生郡を中心とした地域の出身者であった。

次に、「人別御改手形之事」によって、天保 3 年（1832）から慶応 3 年（1867）の 36 年間における儀兵衛家の家族構成を見てみよう。天保 3 年には、儀兵衛（46 歳）、妻つね（38 歳）、子せん（14 歳）、子ふみ（11 歳）、子政次良（9 歳）、子捨三郎（6

(19) 日野町史編さん室寄託吉村儀兵衛家文書。この文書は、全部で 34 通あり、この間には文久元年と慶応 2 年が欠けているだけである。いずれも 3 月に記録されている。

歳)の合計6人であった。これは、3代目儀兵衛である。天保4年には、子延(2歳)が増えており、天保3年3月から12月の間に誕生したようである。この延も天保6年には「去年七月死去仕候」とあり、天保5年に3歳で死亡した。また、天保10年には、子ふみが「去ル戌十一月病死仕候」とあり、天保9年11月に17歳で病死した。天保11年には、「政次良改庄助」(17歳)とあり、長男の政次良が庄助に改名している。天保12年には、子せんが「去ル子十一月縁付仕候」とあり、天保11年11月に22歳で嫁に行った。天保14年には、「子捨三良改、藤三良」(17歳)となっており、次男の捨三良が藤三良に改名している。弘化2年には、儀兵衛が「去ル辰ノ五月相果申候」とあり、天保15年5月に58歳で死亡しているのがわかる。したがって、弘化3年(1846)には、庄助が儀兵衛を継いで、儀兵衛(23歳)、弟藤三良(20歳)、母つね(53歳)の3人家族となっている。これが、4代目儀兵衛である。嘉永2年(1849)には、妻むめ「去申九月ニ貫申候」とあり、嘉永元年9月に妻むめ(18歳)を迎えているが、嘉永5年には「離別仕申候」と離縁している。

安政3年(1836)には、儀兵衛(33歳)、妻いと(「去卯九月貫申候」, 26歳)、弟藤三良(29歳)、母つね61歳とあり、安政2年9月に再婚し、合計4人家族となっている。そして、安政4年7月には、悻千太郎、安政5年には娘つるが誕生した。ところが、つるは安政6年8月に死亡している。文久2年(1862)には、儀兵衛(39歳)、妻いと(32歳)、悻千太郎(7歳)、弟藤三郎(「去酉五月縁付仕候」, 36歳)、母つね(「去酉六月相果申候」, 68歳)とあり、文久元年5月に弟藤三郎が養子に行き、母つねが6月に死亡したため、合計3人家族に減少した。さらに、文久2年7月に悻千太郎(7歳)が死亡し、同年4月には娘せきが誕生している。元治元年(1864)11月には悻捨次郎、慶応2年(1866)9月には悻友三郎が誕生し、慶応3年には、儀兵衛(44歳)、妻いと(37歳)、娘せき(6歳)、悻捨次郎(4歳)、悻友三郎(2歳)の合計5人家族に増加した。いずれにしても、出生率の高さ以上に、乳幼児の死亡率の高さが目立っている。

それでは、近江国蒲生郡小谷村に本拠地をもつ儀兵衛と下野国芳賀郡谷田貝

の久下田店の儀右衛門との関係はどのようになっていたのか、検証してみよう。儀兵衛と儀右衛門は同一人物なのか、儀右衛門は店名前であって架空の名前と考えてよいのだろうか。そのために、両者が掲載されている同年代の正月と３月との違いはあるが、「御宗旨人別帳」と「人別御改手形之事」を比較してみることにしよう。たとえば天保３年では、「御宗旨人別帳」の儀右衛門は46歳で、惲の庄助は9歳であり、「人別御改手形之事」でも儀兵衛は46歳であり、惲の政次良（天保11年に庄助に改名）も9歳である。また、前述したように天保15年3月に儀兵衛が58歳で死亡し、弘化３年には代替わりして儀兵衛が23歳となっている。儀右衛門も弘化２年には59歳となっているが、翌３年には23歳とあり、死亡の確認が少しずれているものの、両者は連動している<sup>(20)</sup>。慶応３年も儀兵衛44歳、儀右衛門44歳で一致している。

このように、儀兵衛と儀右衛門は同一人物であり、近江国蒲生郡小谷村の儀兵衛は、出店である下野国芳賀郡谷田貝町の久下田店においては、儀右衛門を店名前として用いて寄留していた。そして、近江国の本家と久下田店とを毎年のように往復して家産の管理と事業経営の任務に当たっていたのであった。

### 3 奉公人請状

吉村儀兵衛家には、享和３年（1803）から明治４年（1871）にいたる儀兵衛宛の53通の「奉公人請状」が残存する。それ以外にも、年未詳のものや雛形などの請状も残されている<sup>(21)</sup>。そこで、下野国の酒造店への奉公と思われる52通の「奉公人請状」を以下分析することにする<sup>(22)</sup>。

まず、享和３年２月の喜介の奉公人請状<sup>(23)</sup>を次に示そう。

#### 奉公人請状之事<sup>(24)</sup>

(20) 前稿で述べたように、２代目儀兵衛は文政11年7月に没しているが、儀右衛門も文政12年78歳、翌13年には44歳と代替わりしており、儀兵衛と儀右衛門が一致している。

(21) 日野町史編さん室寄託吉村儀兵衛家文書。寛政４年には喜八と久七の２通の小谷村弥惣兵衛宛ての同様の奉公人請状が存在するが、これは前述したように寛政元年に分家した弟の弥惣兵衛宛ての請状と思われる。

一此喜介と申者当年廿才ニ相成出生慥成者ニ付、我等請人ニ罷立貴殿関東  
酒店江当亥春巳ノ暮迄七ケ年之内御奉公ニ差遣シ申候、尤給金之儀ハ、  
酒屋御仲間衆様働相応ニ被遣可被下候、猶又此もの御氣ニ入り申候ハ、  
証文ニ而茂御召遣ひ可被下候、尤此度金子四両慥ニ借用仕候所、実正ニ  
御座候

一宗旨之儀ハ代々一向宗ニ而、則当村教法寺門徒ニ紛無御座候、則寺請状  
請人方へ請取置申候、御入用之砌者何時ニ而も差遣シ可申候

一御公儀様御法度之儀不及申ニ、其所御店御作法何ニよらず、急度為相守  
御奉公大切ニ為相勤可申候、若又此もの取逃欠落ハ不及申ニ、其外如何  
様之六ケ鋪義出来候共、親類請人引請何方迄も罷出急度埒明、貴殿江少  
シ茂御損毛御難儀相懸ケ申間敷候、万一此者大病相煩ひ候歟、又ハ急病  
ニ而万々一之儀御座候共、此方江ハ不及御届ケニ貴殿思召次第ニ御取置  
可被下候、若又御氣ニ入不申候ハ、何時ニ而も御暇御出し可被下候、  
其節一言之子細申間鋪候、御商内場所江立入申儀ハ、勿論御商売之障り  
ニ相成候儀者為致申間敷候、為後日仍而請状如件

享和三年亥ノ二月 日

甲賀郡針村

親 長蔵<sup>㊤</sup>

✓ (22) 前掲『二宮町史』通史編Ⅱでも、34 通の奉公人請状を分析され、宛名が小谷村の吉村儀兵衛家と久下田の天満屋儀右衛門両名宛になっていたこと、給金は明記されていないこと、奉公人の出身地は蒲生郡を中心に湖南・湖東地域にあったこと、奉公人の交替時期が2月と8月にやや多かったこと、平均年齢は約28歳で、18歳と21～22歳が多く、年長者もいたこと、年季は嘉永7年までは5か年季が標準であったが、それ以後は10年季が標準となっていたことなどを指摘している(444～445頁)。なお、本稿では、これらの請状すべてを含めて分析した。

✓ (23) 現存する同家で最も古い奉公人請状は、安永8年2月の雛形であり、小谷村儀兵衛と常州下妻西町の与三右衛門宛のものである(安永8年2月「奉公人請状之事」日野町史編さん室寄託吉村儀兵衛家文書)。与三右衛門は下妻店の店名前であり、明和2年に開かれた下妻店の奉公人を雇用するための雛形のようなものである。

✓ (24) 享和3年2月「奉公人請状之事」(日野町史編さん室寄託吉村儀兵衛家文書)。

同町

請人 六左衛門<sup>㊟</sup>

北脇村釜屋

同 利兵衛<sup>㊟</sup>

小谷村

吉村儀兵衛殿

右前文之通少シ茂相違無御座候、仍而印形致し候

庄屋 多六<sup>㊟</sup>

このように、明確に「関東酒店江当亥春々巳ノ暮迄七ケ年之内御奉公ニ差遣」と、関東における酒店での奉公であることを明示している。宛て名は、この事例では小谷村の吉村儀兵衛だけであるが、他の請状には、「小谷村儀兵衛」と並んで「下野芳賀郡久下田 天満屋儀右衛門」との連名宛てになっており、すべての請状に「関東酒店」「関東出店」「久下田町貴殿出店」の文言があり、吉村家の関東出店への奉公人請状であることがわかる。文言は、全体としてほぼ統一されており、雛形が何通か残されていることから、それらの雛形を手本にして認められたようである。年代的には、弘化から嘉永期にかけて少し欠けているが、ほぼ毎年のように残されている。しかし、多い年でも2人しか雇用しておらず、年に1～2人の奉公人が雇われていたようである。

月別では、正月2人、2月10人、3月5人、4月7人、5月3人、6月4人、7月5人、8月10人、9月5人、12月1人の合計52人である。10～11月には見られず、2月と8月にやや集中しているのは、吉村家が酒造業を営み、酒造作業が季節的に集中するため、その前後にあたる時期に雇用される機会が多いことによるものと思われる。

年季は、1年季2人、3年季3人、5年季29人、7年季4人、10年季8人、不明6人の合計52人である。ほとんどが5年季、あるいは10年季に集中している。特に、文政期以降は5年季、安政期以降は10年季がほとんどを占め、定式化しているようになっている。



出仕年齢は、最も早いのは13歳で、最高齢は54歳であり、ほかに18歳3人、19歳1人、20歳3人、21歳3人、22歳8人、23歳5人、24歳1人、25歳3人、27歳1人、28歳1人、29歳2人、30歳1人、31歳1人、32歳3人、34歳1人、36歳1人、41歳1人、42歳2人、44歳1人、46歳1人、50歳1人、51歳1人、54歳1人、不明5人である。意外と10代は少なく、20代前半にやや多い。しかも、30代以降や50代もある程度見られ、年齢は分散している。13歳は例外として、出仕年齢の高さが注目される。これは、吉村家が関東で酒造業を営んでおり、単なる商業労働にのみ従事する近江商人の労働のあり方と異なる労働のあり方、すなわち酒造労働をも包摂していることが関係しているのかも知れない。これは、前述した久下田店の「御宗旨人別書」の内容とも一致する。50歳以上の者も、5年季あるいは10年季とあり、他の奉公人と同様の文言となっている。

宗旨は、浄土宗24人、浄土真宗22人、禅宗1人、不明5人であり、小谷村儀兵衛家の宗旨である浄土宗が最も多いが、浄土真宗もそれに比肩している。

出身地は、すべて近江で、蒲生郡33人（日野町5、野出村5、金屋村4、高木村4、林村3、八幡新町・石谷村・仁本木村・石原村・小今村・音羽村・川合村・岡本宿・長屋村・川守村・上羽田村各1）、甲賀郡6人（水口3、林口村2、鉢村1）、神崎郡5人（北村4、築瀬村1）、愛知郡3人（大門村・畑田村・栗田村各1）、犬上郡2人（太堂村・四十九村各1）、栗太郡2人（霊仙寺村・鎗村各1）であった。蒲生郡が63%を占め、ほとんどが蒲生郡小谷村周辺の村々の者であった。特に多いのは、日野町、野出村、金屋村、高木村であり、甲賀郡の水口や神崎郡の北村も3人以上の奉公人を輩出している。

給金については、「給金之儀者、酒屋御仲間衆格働相応ニ被遣可被下候」とあり、具体的な金額は示されていないが、酒造仲間の規定に従い職務に応じて支払われた。ここにも、単なる商業労働に従事する奉公人とは異なる酒造労働の特殊性が示されているものといえよう。

なお、ここに掲げた奉公人請状に登場する人物は、前述の久下田店の「御宗

旨人別書」に掲載されている人物にすべて一致するものではない。もちろん請状の何人かは「御宗旨人別書」にも同一人物として記載されているが、必ずしもすべてが記載されているわけではない。それは、両者の史料的性格や年代の相違ということもあるが、吉村家には久下田店以外にも、関東に多くの酒造出店を抱えており、久下田店は関東での中核的店（本店）であったが、他の出店に直接奉公に行った場合や、他店から久下田店へ移動した者、また請状を出したが、久下田店で「御宗旨人別書」に記録される前に解雇されたり、他の出店へ移動したりした場合などさまざまなケースが考えられるため、両者が完全に一致することはない。

#### 4 店則と雇用

ここでは、久下田店の店則などを中心に吉村儀兵衛家の雇用について考えてみたい。吉村家には、年未詳の「店法書附之事」<sup>(25)</sup>と天保14年（1843）の「店内仕法書」<sup>(26)</sup>という店則が残されている。「店内仕法書」には、「兼テ店内之掟ニ法度ニ候得とも」「其外先規之掟堅相守可申候事」とあり、また前半部分が欠如した「店法書附之事」と同類の史料も残されていることから、「店法書附之事」は天保14年の「店内仕法書」以前に何度も改定され、伝えられてきたものと思われる。<sup>(27)</sup>

これらの店則からは、主人を頂点に、支配人が支配方として店の統轄を行い、その下に営業や管理を担当する帳場勤方があり、さらに子供や若年の者による台所部門の勝手向が存在したことがわかる。また、質屋稼業も行っていたため

---

(25) 「店法書附之事」（栃木県立文書館寄託吉村儀兵衛家文書）。この史料は、全文『栃木県史』史料編・近世三（栃木県、1975年、802～805頁）に掲載されている。『栃木県史』通史編5・近世二（同、1984年）、1014～1017頁。

(26) 天保14年「店内仕法書」（栃木県立文書館寄託吉村儀兵衛家文書）。この史料は、全文『二宮町史』史料編Ⅱ 近世（二宮町、2005年、927～930頁）に掲載されている。前掲『二宮町史』通史編Ⅱ 近世、446～448頁。

(27) これらの店則については、拙稿「コラム 吉村儀兵衛家の店則」（高嶋雅明・天野雅敏編前掲『近世近代の経済と社会』）参照。

質方店員も抱え、ほかに酒造労働に従事する蔵働が存在した。酒造部門では蔵人として、杜氏を頂点に糶屋、働之者、めしたき、春屋がいた。

そして、「造り中并ニ火入之節ハ帳場の手伝可申候事」とあるように、酒造労働の繁忙時には、店方である帳場の者が作業を手伝ったりしたようで、店方と蔵方とは、さほど厳密に区別されているものではなかったようである。さらに、「酒之儀は親方持とハ申ながら、随分気を付、舁出方打割水之義、折々相尋、算入、夏酒火入あるひハ呑口桶輪替等迄、其時々申談し之事」とあるように、酒造についても蔵人に全面的に任せるのではなく、その都度いろいろと相談しながら作業を行っていたようである。ただ、「親方舁取酒はかり候節は、帳場役何事によらず問尋候義は、見合差控之事」とあり、作業内容によっては、店方が干渉できないこととなっていた。

「店内仕法書」には、旧来の500石以上酒造高の蔵は、250～300石に減じ、蔵人も「杜氏頭兼テ 𠵿人」「糶屋貳番兼而 𠵿人」「働之者国人ニ而 貳人」「めしたき 𠵿人」「春屋 貳人」の合計7人とし、旧来の400石以上の酒造高の蔵は、200～250石に減じ、蔵人は「杜氏頭兼而 𠵿人」「糶屋内人兼而 𠵿人」「働之者国人ニ而 𠵿人」「めしたき 𠵿人」「春屋 貳人」の合計6人としていた。さらに、旧来の300石前後の酒造高の蔵は、100～150石に減じ、蔵人を4人とするように仕法を定めているところから、吉村家の久下田店には4～7人程度の蔵人が存在していたことがわかる。

主人と奉公人との関係についても、「店法書附之事」には、「主人方不身持、不埒、あるひハ心得違之節は、支配方始帳場一統申合、其段無遠慮、是非を可被申入事」とあり、主人への諫言を定めている。また、「帳場勤方之儀ハ、支配人始、上下和義和談専として、相勤可申事ニ候、并傍輩中睦敷、不埒不行跡之勤方、こころへ違之筋を見聞届候ハ、早速実意を以、くれくれ異見を差加へ候事」とあり、店員間の意思疎通、切磋琢磨を期待している。さらに、「食事等、主人方始上下末々迄一同之事に候、主人と帳場、別鍋あるひハ食好等之義ハ、決して無用ニ候」と主人を含めた公平意識を謳っている。また、病気に対

しても、「家内病氣之段は、支配方帳場従すべからくこゝろを付添候事、但蔵働病氣之節ハ、帳場より輕重を見届、随分薬用食事日々氣を付、介抱帳場持ニ可被致事」とあり、蔵人にまで氣を配り、薬や食事、介抱の手配をしている。「店内仕法書」においても、「食事之儀ハ、主人始上下末々ニ至迄、別鍋ハ兼テ店内之掟ニ法度ニ候得とも、今般仕法替ニ付而ハ尚亦急度相守可申候事」とあり、再度主人を含めた平等意識を確認している。

こうして店員仲良く意思の疎通を図り、不行跡のないように慎み、「忠勤ヲ專ニ相励可申候事、店相続いたし時節来り候ハ、立身可致儀、兼而心得可有事ニ候間、第一ニ商売筋正露ニ出精いたし、偏ニ身ヲ励可申事ニ候」とあるように、忠勤に励み、それを成し遂げることによって、店員の将来が保証されるとしている。